

豊田市の建築

自動車産業で有名な豊田市だが、著名な建築家が設計した建物や名所も数多く存在する。1995 年に開館した豊田市美術館は、ニューヨーク近代美術館のリニューアル設計を担当した谷口吉生（1937 年生まれ）が設計した。谷口氏は、この建物を「芸術の魔法への旅」のために作ったと語っている。

このモダニズム建築は、それ自体が芸術作品である。丘の上に建ち、豊田の街並みが一望でき、屋外テラスにはリフレクティング・プールや、アメリカのランドスケープ・アーキテクト、ピーター・ウォーカー（1932 年生まれ）が設計した彫刻庭園がある。周囲の木々が美術館を隠し、訪れる人に徐々にその姿を見せるようになっている。内部は、1 階は暗く、上階は明るく、広々とした空間になっており、光の環境が変化するように設計されている。

また、谷口氏が設計した茶室「童子苑」は、ミニマリズム、クリーンなライン、柔軟な空間利用など、日本建築と現代建築の共通点を強調している。同じく谷口氏の設計による高橋節郎館は、漆芸の先駆者である高橋節郎（1914-2007）の作品を展示する別棟だ。また、2024 年には「豊田市博物館（仮称）」が近くの開館予定である。この美術館は、フランスのポンピドゥー・センター・メッツや大分県立美術館の設計者である坂茂（1957 年生まれ）の設計によるもので、豊田市の歴史と文化と自然をテーマにしている。ピーター・ウォーカーがデザインしたランドスケープ・ガーデンや屋外広場も設置される。

日本建築のメタボリズムの創始者であり、東京の中銀カプセルタワーやクアラルンプール国際空港などのランドマークを設計した黒川紀章（1934-2007）も、豊田市の姿に貢献している。豊田市誕生 50 周年を記念して、豊田大橋（1999 年開通）と豊田スタジアム（2001 年開業）を設計した。橋は、豊田市の中心部からスタジアムにつながるもので、そのアーチがスタジアムの屋根の曲線を引き立てている。矢作川に架かる豊田の他の橋も興味深いものがある。アーチ型の平成記念橋、久澄橋、そして印象的な矢作川橋（通称：豊田アローズブリッジ）がある。

トヨタ鞍ヶ池記念館は、東京のスパイラルビルやサンフランシスコのヤーバブエナ芸術センターなどの設計で知られる槇文彦（1928 年生まれ）のモダニズム建築をもとに、1974 年に建てられたトヨタ自動車の歴史を紹介する博物館だ。鞍ヶ池公園にあるこの博物館は、トヨタの功績を称えとともに、訪れた VIP のための迎賓館としても機能している。その隣にあるトヨタ創業者・豊田喜一郎氏の旧居は、名古屋の近代建築の父とも呼ばれる鈴木禎次（1870-1941）が和洋折衷で設計した 1930 年代の 3 階建ての住宅である。

鞍ヶ池公園には、東京の国立競技場やフランスの文化センター「FRAC マルセイユ」を設計した隈研

吾（1954 年生まれ）がデザインした長方形の小さな移動式バンガローが 5 棟。隈氏は、一般的なモバイルハウスのスペースと快適性を最大限に活用する方法として、アウトドア用品ブランド「スノーピーク」とのコラボレーションにより、この「住箱」（"住むための箱"）を制作した。この世界的な「タイニーハウス」運動にも通じる建物は、パーク内のグランピング施設として借りることができる。

豊田市逢妻交流館は、ニューヨークのニューミュージアムや金沢 21 世紀美術館などを手がけた SANAA の妹島和世（1956 年生まれ）が設計した地域コミュニティの拠点である。妹島氏は女性として 2 人目のプリツカー賞を受賞した（SANAA のパートナーである西沢立衛と共同受賞）。曲面で構成された建物は透明性を重視しており、会議室は床から天井までのガラス窓と壁で構成されており、外からも中からも様子が伺えるようになっている。